

農業の新しい技術

No.620 (平成22年5月)

分類コード 02 - 04

熊本県農林水産部

抑制キュウリにおける「つる下げ」栽培は 作業が省力的で収量・品質が向上する

農業研究センター 農産園芸研究所野菜研究室

担当者：彌富道男

研究のねらい

キュウリを市場或いは業務用として安定的に出荷するためには、毎日行う収穫作業の他、整枝・誘引・摘葉等の各種作業を簡易的・省力的にして、生産者の作業負担を軽減する必要がある。また、雇成型経営においても軽作業が求められる。そこで、抑制栽培における作業の省力化を図るために、「つる下げ」栽培技術を確立する。

研究の成果

1. 「つる下げ」栽培は、「摘心」栽培よりも、整枝・誘引作業時間では82%、摘葉作業時間では51%に削減でき、省力化が図れる(表1)。
2. 「つる下げ」栽培は、可販果収量、可販果率は高まるが、やや果形が細い(表2、図1)。
3. 「つる下げ」栽培は、生育後半も着果が連続的に継続するため、収穫果数は低下しにくい(図2、図3、図4)。

以上のことから、本県の抑制作型において、「つる下げ」栽培は、作業が省力化され、収量・品質が向上することが明らかとなった。

普及上の留意点

1. 抑制作型(は種期8月中旬、収穫期10月中旬～1月下旬)の試験結果である。
2. 供試台木は、「昇竜」である。
3. 穂木品種には、脇芽の発生が遅い品種を利用する。
4. 「つる下げ」栽培は、主枝17～18節摘心後、12～16節からの子蔓を4本残し、左右に2本ずつ振り分けて誘引した。「摘心」栽培は、主枝18節摘心後、子蔓を1節または、2節で摘心し、孫蔓については放任、適宜摘心を行った。
5. キュウリ退緑黄化病が初期に発生すると、生育・収量への影響は大きくなるため、微小害虫に対しては適期防除が不可欠である。

表1 整枝方法の違いによる作業時間の比較

整枝方法	整枝・誘引	摘葉	合計	作業の省力性
摘心	4.6時間(100)	3.5時間(100)	8.1時間(100)	
つる下げ	3.8時間(82)	1.8時間(51)	5.6時間(69)	

各区とも品種は‘フスコダ’ツシュ’、‘輝世紀’を同株数ずつ栽植している。

調査規模：44m² (1畝22株、畝幅2.0m×株間0.5m)、調査期間11月20日～26日の7日間

表2 整枝方法の違いが収量品質に与える影響

品 種	整枝方法	可販果収量 (t/10a)	可販果率 ^{z)} (%)	1果重 (g)	果形比 ^{y)}
フスコダ’ツシュ	摘心	11.0	84.6	101	6.40
	つる下げ	11.2	90.1	94	6.55
輝世紀	摘心	10.4	86.2	104	6.69
	つる下げ	11.4	88.7	96	6.73

z)可販果率：(秀・優・良果数) / 総果数×100、y)果形比：縦長 / 横径

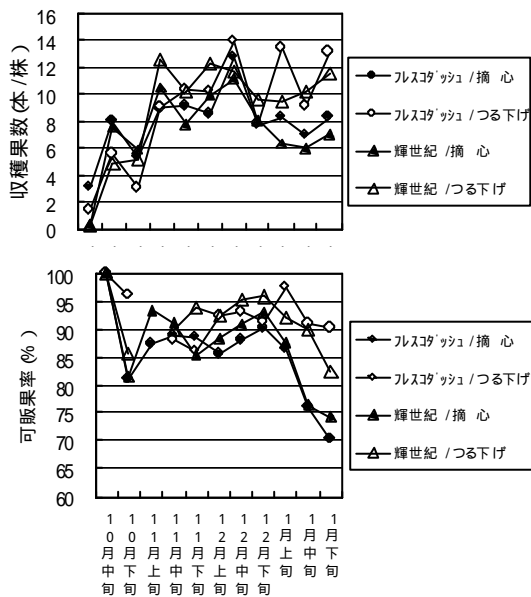


図1 可販果数と可販果率の推移



図3 「つる下げ」4本仕立ての様子
成長点から20cm程度をクリップで
固定して、蔓を垂直に誘引。

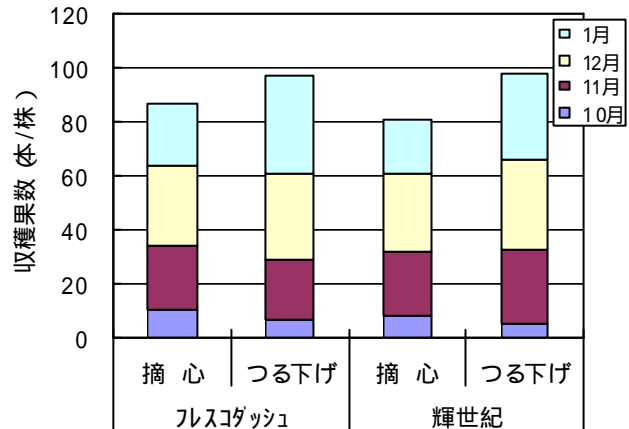


図2 整枝方法の違いによる収穫果数の比較

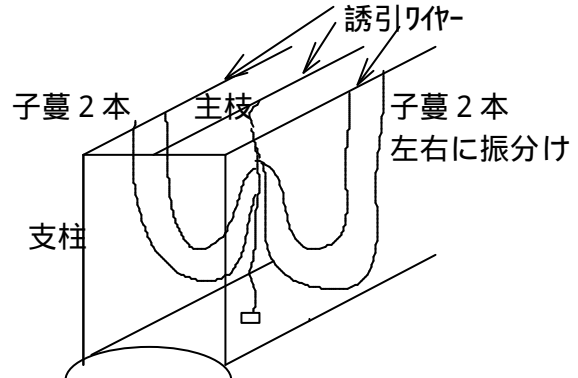


図4 「つる下げ」栽培のイメージ図